

戦後作文・綴り方教育史研究

— 第1回作文教育全国協議会(中津川大会)に見る戦後作文・綴り方復興の一側面 —

菅原 稔

Keywords : 戦後, 作文, 綴り方, 第1回作文教育全国協議会, 中津川大会

1. はじめに

わが国の、戦後の教育・国語教育、わけでも「書くこと(作文・綴り方)」教育は、「昭和二十二年度(試案)学習指導要領 国語科編」^(注1)、および「昭和二十六年(一九五一)改訂版 小学校学習指導要領 国語科編(試案)」^(注2)によって公教育としての内容・体制を整えた。

このような法制的な整備の下、一方で、戦後の新たな「書くこと(作文)」教育の考えに立つ「作文教育 第一集」誌^(注3)や「実践国語」誌^(注4)が刊行されるとともに、また一方で、戦前からの「書くこと(綴り方・生活綴り方)」を復興・再出発させようとする「つづりかた通信」誌^(注5)や「作文と教育」誌^(注6)等も創刊された。また、それぞれの立場による、国分一太郎『新しい綴り方教室』^(注7)、無着成恭『山びこ学校』^(注8)、倉澤栄吉『作文教育の体系』^(注9)等の出版も相次いだ。

この流れの中で、岐阜県中津川市において「第1回 作文教育全国協議会」が開催(1952(昭和27)年8月1日～3日。岐阜県教職員組合、日本作文の会、恵那作文の会共催。以下「中津川大会」と表記する。)された。これは、ある意味で、戦後の「書くこと(作文・綴り方)」教育の復興・再出発が順調に、また積極的に行われた一つの姿を示すものといえる。しかし、他方で、この「中津川大会」は、戦後の「学習指導要領」に即した「書くこと(作文)」とは異なる、戦前の、いわゆる「生活綴り方」を継承・発展させた、新しい意味での「綴り方(作文)」の立場に立つものと理解できる。この「書くこと(作文)」と「綴り方(作文)」は、その後も、しばしば、前者が「学習指導要領」に即する立場に立つもの、

後者が「民間教育団体」の考えに立つものと、対比的(対立的)にとらえられてきた。しかし、両者をわが国の「書くこと(作文・綴り方)」という広い視点から見ると、それぞれが果たしてきた役割や成果は大きく、相互に補完するものとして正しく評価することが必要である。

本稿では、このような立場から、「中津川大会」を取り上げ、この会が、戦後間もない1952(昭和27)年当時に、どのような経緯を経て開催されたのか、また、何が論議され成果として確認されたのか、その経過、内容、意義、特質等を考察する。それによって、戦後の「書くこと(作文・綴り方)」の歴史的な成立・展開のありようを明らかにし、現在にも通じる成果や課題を確かめることができればと考える。

2. 「中津川大会」開催にいたる経過

「中津川大会」の主催団体の一つである日本作文の会の機関誌「作文と教育」^(注10)は、1950(昭和25)年11月1日に創刊されたが、当初は「同人一千名運動を！」^(注11)、「同人一千名運動は、ようやくそのなかばに達しました。」^(注12)等とあることから、その刊行が必ずしも順調ではなかったことがうかがえる。ただ、「つづりかた通信」誌に掲載されている無着成恭の回想^(注13)によれば、戦後いち早く刊行された児童向けの雑誌「子どもの村」「子どもの広場」「少年少女の広場」等にあった児童の文章や文集等の紹介欄がきっかけとなり、各地の教師の間で文集交換や文通が始まったとのことである。また、当時、この「つづりかた通信」誌の他に、「子午線」誌^(注14)、「耕人」誌^(注15)等の比較的小規模な同人誌もあった。それらがきっかけとなって、日本作文の

会の発足や「作文と教育」誌の創刊が知らされるとともに、各都道府県や市郡等を単位とする作文の会、あるいは作文を中心とする集まりが持たれたことが推測される。

このような、全国的な動向を前提とし、「作文と教育」誌の刊行を始めていた日本作文の会の働きかけによって、すでに会員300名を擁していた^(注16)「恵那綴方の会」を中心に、岐阜県恵那地方の中心地である中津川での大会が開催された。

なお、岐阜県では、戦前、1930（昭和5）年8月7～8日に「新興綴方講習会」が開催され、その折の主なメンバーであった野村芳兵衛、川口半平、峰地光重、今井誉次郎らが健在であったことも、この「中津川大会」開催を可能にした要因の一つと考えられる。

3. 「中津川大会」の概要と性格

本稿末尾（47ページ）の2点の資料のうち、上段の「作文教育全国協議会 開催案」の見出しのものは、事前の案内と提案・発表者の募集を兼ねて全国の作文の会、あるいは参加予定者に郵送されたもの、下段の「第一回 作文教育全国協議会」の見出しのものは、当日に大会会場で配布されたものである。これによれば、当日には、事前の案内の際の予想を超える発表者や参加者があったことが分かる。また、司会者や議長団になっている参加者は、国分一太郎、野村芳兵衛、上田庄三郎、鈴木道太、峰地光重ら、いずれも戦前からの著名な作文・綴り方人であるが、発表・提案者は、ほとんどが、戦後に作文・綴り方教育に取り組んだ、比較的若い教師たちである。このような、発表・提案者のありようから、この「中津川大会」が、戦前の作文・綴り方の伝統を再興し継承するという側面を持ちながらも、より大きくは、戦前の伝統や成果を、戦後の新教育としての「作文・綴り方」として吸収しようとするものであった。言い換えれば、戦前に我が国の風土の中から生み出された独自の、また、優れた教育方法の一つである「綴り方（生活綴り方）」を、戦後の新教育を支える固有の方法として取り上げようとするものである。だからこそ、戦前の生活綴り方の伝統を知る教師の指導・講演による講習会としてだけではなく、より強くは、戦後教育の再出発を担う若い教師たちによる、ある意味で”戦後の新たな「綴り方（生活綴り方）」教育”が目指されたと考えられる。そのような方向性を持つからこそ、第2日目の「教育実践報告」、第3日目の「議案」が、このような形で持たれたのである。

4. 戦後の作文・綴り方教育における「中津川大会」

「中津川大会」開催当時—1952（昭和27）年8月—までには、すでに、2度の「学習指導要領（試案）」が公示され、そこでは、戦後の新しい概念としての「書くこと（作文）」という用語が用いられた。また、国分一太郎の『新しい綴方教室』では、「かがやかしい伝統をもつ」^(注17)用語として、「綴方」が用いられている。この「書くこと（作文）」と「綴方（綴り方）」の二つの用語は、共通する側面を持ちながらも、国語科の1領域としての「書くこと（作文）」と、生活指導ないし生活問題解決のための指導を含む「綴方（綴り方）」として、図式的に対比され、その違いを強調する余り、対立的に取り上げられることがあった。

それが教育（国語教育）の場を超えて広く社会の目を集めたのは、次の3つの新聞記事がきっかけであった。

・「『つづり方』か“作文”か—学校作文への反省—」

朝日新聞 1952（昭和27）年3月1日

・「混乱する綴方教育 生活文か、作文か、『指導要領』に教師の悩み」

読売新聞 1952（昭和27）年4月25日

・「社説 教育の観念化を恐れる」

毎日新聞 1953（昭和28）年4月6日

上の新聞記事では、「つづり方」「生活文」と「作文」とが、それぞれ、『山びこ学校』と「学習指導要領」に代表されるものとして対立（対比）的にとらえられている。映画化・劇化され、一つの社会現象にまでなつたとされる『山びこ学校』への高い評価が、「学習指導要領」に基づく国語科「書くこと（作文）」への「反省」を促し、「教師の悩み」を生み出しているとする。

このような「つづり方」「生活文」「作文」をめぐる事柄が、当時—1952（昭和27）年および1953（昭和28）年—の新聞3紙に取り上げられていることから、この問題が教育界を超えて、ある意味で社会的な話題にまでなっていたことがうかがえる。また、その反響は、当然、国語科の「書くこと（作文）」教育にも様々な形で及んでいる。その一つが、「教育建設 第3号 生活綴方と作文教育」誌^(注18)の刊行である。

いま、この「教育建設 第3号 生活綴方と作文教育」誌の目次・構成のうち、「序説」に収められている3編の論稿の題目と執筆者の氏名、および、第1部から第4部までの見出しの言葉とそれぞれに収められている論稿の数を示すと、それは、次のようになっている。

序 説

1. 「書く」学習の位置と意義…西尾実
2. 綴方と作文…周郷博
3. 綴り方の文学的性格…百田宗治

第一部 生活綴方の動き（全11編）

第二部 作文教育のありかた（全13編）

第三部 文集をめぐって（全12編）

第四部 綴方のあとさき（全13編）

この「教育建設 第3号 生活綴方と作文教育」誌には、上の「序説」にあげた3編の他に、国分一太郎、滑川道夫、石井庄司、倉沢栄吉、今井誉次郎らの手になる53編の論稿が第一部から第四部までに掲載されている。ただ、この構成および見出しの言葉から、「教育建設 第3号 生活綴方と作文教育」誌が、「生活綴り方」と「作文」についての、各執筆筆者それぞれの立場からの論稿を並列する「論集」として構成されており、理論・実践についての共通点・相違点の意図的・意識的な掘り下げ、対比、あるいは「生活綴り方」「作文」のどちらかを支持する特定の立場に立つ論稿等は見られない。その意味からは、先の新聞各紙で取り上げられた『「つづり方」か「作文」か』『「生活文か、作文か」等をめぐる問題に対する「当事者」とも言える研究者・実践者からの十分な回答・提言とはなり得ていない。

このような、新聞各紙および「教育建設 第3号 生活綴方と作文教育」誌等による、後、「作文・生活綴り方教育論争」^(注19)とも呼ばれる論議の最中に、「中津川大会」が開催され、その第2日目に、次項にあげた17編の「作文教育実践報告」が行われたのである。

5. 「中津川大会」の内容と特質

プログラムで見る限り、「中津川大会」第1日の「作文教育実践報告」は個人が、第2日の「作文教育今後の発展のために」は各地域の作文の会等が、それぞれ、発表・提案する形になっている。しかし、この個人と作文の会等は、ほとんど重なっており、第2日の発表者の大部分が、第1日の発表者と同一であることが分かる。

「作文教育実践報告」の発表の概要は、「作文と教育」誌第10号に「作文指導実践報告（要項）（原稿到着分のみ）」として掲載されている。^(注20) いずれも、900字程度の比較的短いものであるが、それぞれに発表題目として掲げられている見出しの言葉と、その内容から、発表のおおよそを理解することができる。

いま、それぞれの発表題目と報告者の所属及び氏名を取り出すと、それは、次のようになる。

1. 作文指導から体得したもの—教師としての成長の自覚— 長崎作文の会 草野繁治
2. 子どもとともに 大阪綴方の会 清原久元
3. 裸の生活記録から 茨城 吉原 正
4. 一年生の作文指導 高知 広田早紀
5. 「すずめの子」のこと 紀南作文教育研究会 藤田五与
6. 一年生の生活と書くことへの導入 静岡・志太作文同好会 大石みち
7. 作文指導と学級経営 北海道作文教育の会 五井治保
8. 校内作文運動（作文大衆化の最も近き方法） 兵庫作文の会 八木清視
9. わたくしの綴方教室 東京・赤とんぼ会 綿引まさ
10. 「創作の日」設定の主張 愛知 竹内和夫
11. クラブ活動による作文指導について

- 横 浜 岩田吉之輔
12. 童詩の学習について 京 都 金子欣哉
13. 劇と綴方は手を結べ 新 潟 高橋 昭
14. 理科学習の綴方 福 岡 小林 実
15. 恵那綴方の会の歩み 恵那綴方の会 丸山雅巳
16. 未 定 富 山 佐野善雄
17. 東京大学教育学部 太田 堯

上の発表題目には「作文」「書くこと」「綴方」の3つの言葉が使われているが、この「中津川大会」における「作文教育実践報告」の内容について、いくつかの特質を指摘することができる。

まず第1は、当時、「作文」「綴方（綴り方）」をめぐる様々な論議（論争）が、行われていたにもかかわらず、それらを取り上げた発表が見られないことである。

いま、上の「作文教育実践報告」のうち、冒頭の二つの論稿—「1. 作文指導から体得したもの—教師としての成長の自覚—」と「2. 子どもとともに」—の一部を取り出すと、そこでは、それぞれ、次のように述べられている。

1. 作文指導から体得したもの—教師としての成長の自覚— 長崎作文の会 草野繁治
田舎の子供にはありがちな—そして私が担任した組の五年生は本当に字も読めないという子供達が多かった。国語の教科書はあまりにもこの子供達にとって高度の読物であり何とかしなければと思って、子供達の作文を国語の教材にしようと時々書かせてみた。書かれたものは「朝おきて顔をあらってごはんをたべて」というものであったが、これらの作文の中からも多くの事実を私は教えられた。そして「朝おきて顔を

あらって」の作文をもっと生き生きとしたものにしたいという願いは、その後の指導によって、漸次実現したかのように思われた。^(注21)

2. 子どもとともに 大阪綴方の会 清原久元

①・日本教育の地盤は綴方によって、かたまるといってもいいのじゃないか。

②・子どもたちに与えるというものじゃなく、彼等の内にもっているものを、ひきだしてやるところに綴方（図画もふくまる）の生命がある。

③・特に綴方は諸教科の中心になっていると思われる。綴り方によって、すべての教科の動きが感じられます。

④・私は綴方から理科へ図画へ社会科へと、しばしば仕事を展開しています。^(注22)

この2つの論稿（「作文教育実践報告」）には、後の「生活綴方的教育方法」と呼びならわされた考え方と通じるものが見られる。

「作文・綴り方」を、児童・生徒の思考・認識と不可分のものととらえ、それによって行われる指導を、生活を支える思考・認識や行動、さらには、各教科の指導とも不可分の関係にあるとする。

ここに見られるとらえ方は、「書くこと（作文・綴り方）」を「文章表現」の技術・能力の指導にとどめず、それに伴う「思考力・認識力」の指導、さらには、他の教科やクラブ活動、学級経営にまで広げようとするものである。このような理解は、この「中津川大会」第1日目の「作文教育実践報告」の「1. 作文指導から体得したもの—教師としての成長の自覚—」「2. 子どもとともに」だけではなく、「3. 裸の生活記録から」「7. 作文指導と学級経営」「11. クラブ活動による作文指導について」「13. 劇と綴方は手を結べ」「14. 理科学習の綴方」等の題目からもうかがえる。これらから、この「作文教育実践報告」にみられる「作文（綴り方）」のとらえ方は、戦後の「学習指導要領」に基づく新たな国語科の1領域としての「書くこと（作文）」としてではなく、戦前の伝統を踏まえた「綴り方（生活綴り方）」の復興、または再評価・再出発としてのものと言える。

次に、第2の特質として、この「作文教育実践報告」所収の論稿のうち、とくに9の「わたくしの綴方教室」に注目したい。この論稿は、「東京・赤とんぼ会」の綿引まさ（東京・黒門小学校）の手になるものであるが、自らの「作文（綴り方）」教育に対する考えが、次のように述べられている。^(注23)

山芋や山びこ学校をはじめとし、生活綴方の出版物が次から次へと出たけれども、みんな農村の実践です。一体、東京では生活綴方はやれ

ないのでしょうか。（中略—引用者）結論だけをいっておくと、東京でも生活を直視させて、そこから正しいものの見方、生き方を身につけさせることができるということ、いや、かえって都市にこそ問題が山積していて大いにやらなければならないのではないかと。

ここでは、出版当時大きな話題を呼び、戦後の作文・綴り方復興の契機となったとまで言われた『山びこ学校』や『山芋』^(注24)が「農村の実践」に基づくものであることに対して、「私は、東京の山びこ学校は貧しい暗い処にだけあるのではないと思う」^(注25)と、都市部においても、『山びこ学校』や『山芋』と同じ観点や立場からの実践を行わなければならないことが述べられている。

このようなとらえ方は、「作文（綴り方）」によって、地域の過酷な状況を見詰めさせ、それらに主体的に取り組む姿勢を培おうとするものである。ここに見られる「作文（綴り方）」観は、「仲間づくり」や「学級集団づくり」等に対する理解を除けば、戦前のとらえ方と、ほぼ同じと言える。

この「わたくしの綴方教室」にみられる綿引まさの考え方は、戦前の「作文（綴り方）」教育を発展させた無着成恭の『山びこ学校』を、都市部における実践として継承するものである。さらに、綿引まさの「かえって都市にこそ問題が山積していて大いにやらなければならない」とする立場は、後、戸田唯巳『学級というなかま』によって、さらに次のように展開する。^(注26)

都市には生活綴方は育たないなどということ、をよく耳にしました。（中略—引用者）けれども—

朝露を踏んで、まぐさを刈に出なければならぬ子どもに、精一ぱいの生活があるのなら、気楽に図書館に行ったり、映画を見たり、あるいはピアノを習ったりすることのできる子供にだって、精一ぱいの生活があるはずだと思いました。

というより、ともすれば生活の中に問題を意識せず、とかく上ずって行きがちな都市住宅地の子どもたちにこそ、生活綴方的教育方法は、より生かされなければならないのではないかと思います。

ここでの「生活の中に問題を意識」するとは、本書の標題にもなっている「学級というなかま」の問題、すなわち、「仲間づくり」「集団づくり」、さらに、児童が生活の中で出会う課題や問題を、「学級というなかま」の立場から共に考え取り組ませる、「課題解決のための指導」である。言い換えれば、

それは、社会あるいは学校・学級での生活上の問題を、「書くこと（綴り方）」によって共有させようとする指導とも言える。それは、「書くこと（綴り方）」を、書き手、あるいは読み手の児童の個人的な活動にとどめず、学級という集団の問題にしようとするものである。このような指導は、後、「書くこと（綴り方）」による生活指導「書くこと（綴り方）」による学級づくり（集団づくり）」の有効な方法の一つとして、広く取り上げられた。

このような、綿引まさや戸田唯巳によって提起された、「書くこと（綴り方）」と児童の生活とを必然的なつながりを持つものとする考え方は、後、「作文（綴り方）」を中心とする民間教育団体である「日本作文の会」の「1962年度活動方針案」で、次のように取り上げられた。^(注27)

…しかし生活綴方の実践者たちが「生活指導」にとりくんだのは、子どもを受けもつ教師としてこれをなしたのであって、この種の生活指導ないし「学級集団づくり」が、生活綴方のしごとと直接に密接不可分な関係をもつのではない。……たとえば小西健二郎「学級革命」戸田唯巳「学級という仲間」にあらわれた「学級づくり」「集団づくり」を「生活綴方的教育方法による学級づくり」等と定式化することなく、彼らが、相対的な独自性を有する「学級集団づくりのしごと」に「生活綴方の作品ないし表現活動を活用した場合」の例として、その適否を批判検討するように提案したい。

ここでは、「生活指導ないしは『学級集団づくり』」が「生活綴方のしごとと直接に密接不可分な関係をもつのではない」く、両者は「相対的な独自性を有する」もの、すなわち、必然的な結びつきを持たない、別個の、また異質のものとされている。このようなとらえ方は、他の民間教育団体、わけでも全国生活指導研究協議会（全生研）や教育科学研究全国連絡協議会（教科研）等からの生活綴り方的な「学級集団づくり」への批判に対応した^(注28)ものと考えられる。戦前からの伝統に基づいた「作文（綴り方）」は、生活認識のための「作文（綴り方）」から、生活問題（課題）解決のための「作文（綴り方）」に、さらには、「学級集団づくり（集団指導）」のための「作文（綴り方）」へと展開し、さらに、この「日本作文の会」の「1962年度活動方針案」以降、文章表現のための、あるいは、文章表現力、および、その基礎となる思考・認識力のための「作文（綴り方）」へと収束する。

このような戦後の「作文（綴り方）」教育の大きな展開の中心になったとも言える事柄が、すでに、

この「中津川大会」における「作文教育実践報告」の中に見出され、注目される。

6. おわりに

この「中津川大会」を取り上げた1952（昭和27）年8月8日付の「読売新聞」は、その様子を次のように述べている^(注29)。

戦後の新教育のとり入れ方が形式主義的に流れ、日本の歴史や社会を無視したことの欠陥への批判や反省が生活綴方や生活詩による人間性にみちた教育方法の再認識をうながしたのは当然であり、綴り方復興の年であるというのは参会者に共通した考え方であった。

ここで言われている「戦後の新教育のとり入れ方」が「形式主義的」であったかどうかはさておき、戦後当初の時代状況の中では、1947（昭和22）年と1951（昭和26）年と相次いで公にされた「学習指導要領」よりも、「アメバ、アメンテカゼバ、カゼナテ…」と山形の方言を用いた1年生の児童の詩で始まる国分一太郎の『新しい綴り教室』や、同じ山形の方言が縦横に駆使された無着成恭の『山びこ学校』の方が、解放感に満ちた、戦後教育のあるべき方向を指し示すものとして歓迎されたことは、想像に難くない。そのような戦後教育に理想を求める教師たちによって、この「中津川大会」は開催されたと考えられる。だからこそ、そこでは二者択一的な「作文か綴り方か」「生活指導か表現指導か」等の問題は大きな議題とはならなかった。そのような議論よりも、まず、「作文や綴り方」が持つ大きな可能性についての論議が取り上げられ、また、積極的に求められたのである。

しかし、だからこそ、その論議の中には、戦後の「書くこと（作文・綴り方）」で取り上げられた問題が、すでに、様々な形で内包されていたことが見出される。

以上から、この「中津川大会」は、戦後当初の、もっとも高揚感に満ちた「書くこと（作文・綴り方）」教育の一つの姿を示すものととらえることができる。

（注）

1. 1947（昭和22）年12月20日 文部省 中等学校教科書（株）
2. 1951（昭和26）年12月15日 文部省 中央書籍（株）
3. 1948（昭和23）年10月25日 八木橋雄次郎
4. 1949（昭和24）年4月1日 西原慶一ら
5. 1950（昭和25）年6月25日、無着成恭ら
6. 1950（昭和25）年11月1日 来栖良夫ら

7. 1951(昭和26)年2月28日 日本評論社

なお、この『新しい綴方教室』は、「教育新報」誌(教育新報社)のNo.5(1949<昭和24>年8月30日)からNo.12(1950<昭和25>年5月30日)まで、「教育時報」誌(日本学力向上研究会)のNo.1(1950<昭和25>年8月30日)、「学力向上研究」誌(学力向上研究会)のNo.2(1950<昭和25>年9月10日)からNo.3(1950<昭和25>年10月30日)までに、「綴方の復興と前進のために」と題して連載された11編の論稿に、「教師の友」(日本学力向上研究会)のNo.1(1950<昭和25>年12月1日)に掲載された「すっきりした文章をかゝせるために」と題した論稿を加え、大幅な加除添削の上でまとめられたものである。

8. 1950(昭和26)年3月5日 青銅社

9. 1952(昭和27)年12月30日 金子書房

10. 創刊第1号から第4号—1951(昭和26)年8月15日刊—までは「日本綴り方の会」の機関誌「作文研究」、第5号—1951(昭和26)年12月1日—は「日本作文の会」の機関誌「作文—先生と生徒—」、第6号—1952(昭和27)年2月20日刊—以降は「日本作文の会」の機関誌「作文と教育」として刊行された。本稿では混乱を避けるために、すべてを「日本作文の会」の機関誌「作文と教育」と統一して表記する。

11. 「作文と教育」誌第1号—1950(昭和25)年11月1日—「編集後記」

12. 「作文と教育」誌第2号—1951(昭和26)年2月1日—「編集後記」

13. 無着成恭「こんなものを何故作る気になったか?」「つづりかた通信」誌第1号—1950(昭和25)年6月25日—p.1

14. 1950(昭和25)年12月7日創刊 吉原正ら

15. 1950(昭和25)年2月10日創刊 鳴原一穂ら

16. 「恵那綴方のあゆみ」「作文と教育」誌第10号—1952<昭和27>年7月20日—p.21に「同人増加し現在300人」とある。

17. 『新しい綴方教室』(前出)「あとがき」p.387

18. 1952(昭和27)年6月1日 金子書房

19. 大内善一『戦後作文・生活綴り方教育論争』1993(平成19)年9月 明治図書

20. 「作文と教育」誌第10号(同上)p.7~p.21

なお、当日に配布された日程表で「未定」とさ

れている「16. 富山 佐野善雄」と「17. 東京大学教育学部 太田堯」の2氏の原稿は掲載されていない。

21. 草野繁治「1. 作文指導から体得したもの」「作文と教育」誌第10号(前出)p.7~p.8

22. 清原久元「2. 子どもとともに」同上 p.8~9

23. 綿引まさ「9. わたくしの綴方教室」同上 p.14~15

24. 1951(昭和26)年2月10日 百合出版

25. 綿引まさ「街の子供は『山びこ』学校からなにを学んだか」「作文と教育」誌第7号—1952<昭和27>年3月20日—p.19

26. 戸田唯巳『学級というなま』—1956<昭和31>年12月20日 牧書店—p.275~276

27. 日本作文の会「意義ある伝統のもとに確信をもって前進しよう—今後の活動方針案—」「作文と教育」誌13巻9号—1962<昭和37>年8月20日—p.109~111

28. 「生活綴り方批判」は、「日本作文の会」と同じ民間教育団体である「教育科学研究全国連絡協議会」(教科研)や「全国生活指導研究協議会」(全生研)を中心に行われたが、これらの批判に対する「日本作文の会」の見解は、下の各論文に詳しい。

・日本作文の会研究部「最近の生活綴方批判の概要」「作文と教育」誌13巻5号1962年5月号 p.69~77

・遠藤豊吉・太田昭臣「生活綴方批判に対する反批判(その1)」

「作文と教育」誌13巻6号1962年6月号 p.46~60

・無着成恭「生活綴方批判に対する反批判(その2)」
「作文と教育」誌13巻7号1962年7月号 p.84~95

・遠藤豊吉「生活綴方批判に対する反批判(その3)」
「作文と教育」誌13巻9号1962年8月号 p.68~79

・遠藤豊吉「生活綴方批判に対する反批判(その4<完>)」
「作文と教育」誌13巻10号1962年9月号 p.52~59

29. 「読売新聞」1952(昭和27)年8月8日「教育」欄

作文教育全国協議会 開催案

- 一、主催 予定 岐阜県教職員組合 日本作文の会 恵那作文の会
二、後援 予定 教育科学研究会 岐阜県教育委員会 教職員組合教文部 児童文学者協会
三、賛助 作文図書に關係深い出版社 教科書会社 等
四、期日 八月 一、二、三日 (三日間)
五、場所 岐阜県 中津川市南小学校 (中央線中津川駅 下車)
六、日程

第 1 日	第 2 日	第 3 日
8 月 1 日	8 月 2 日	8 月 3 日
午前 演 一、(作文) 教育のための 農村生活のみかた・考えかた (仮題) 講 二、(作文) 教育のための 都市生活のみかた・考えかた (仮題)	午前 (北海道 小場昭秋 (岐阜 丸山雅巳 (新潟 高橋 昭 静 岡 大石みち (愛 媛 稲垣寿年 (秋 田 小林 実 兵 庫 八木清規 (茨 城 吉原 正 千 葉 相川日出雄 横 浜 岩田吉之雅 青 森 鈴木喜代春 東 京 綿引まさ 富 山 佐藤善雄 (愛 媛 広田早紀 大 阪 (山 形 無着成恭 長 崎 草野繁治 午後 講演内容をめぐって、 質疑応答による話し合 司会・国分一太郎氏 実践発表をめぐる 討論会 司会・今井誉次郎氏 未 定 未	午前 作文教育に関する協議会 作文教育今後の発展のために 議長団 野村芳兵衛氏 峯地光重氏 (予定 交渉中 鈴木道太氏 上田庄二郎氏 午後 (解 散) 各自の自由なる懇親会 未 定 未

特別な催し

- 1 全日本文集展覧会
2 日本綴り方教育者(個人でなられた方々)をしのぶ会
3 全日本綴り方関係書籍展

日本作文の会側としての運営委員

佐藤 茂 柳内達雄 吉田瑞穂 今井誉次郎 滑川道夫 巽 聖歌
野口茂夫 綿田三郎 藤田圭雄 国分一太郎 来栖良夫 後藤彦十郎

- 七、会 費 二百円 (三日のうち一日のみは百円、二日以上二百円)
八、宿泊希望者は、食費実費一日約百円、外に、米一日一合五勺宛持参
九、申込〆切 七月十日

「参会者名簿作成」「会場」「宿泊」の準備のため、早急に申込みのこと

第一回 作文教育全国協議会 (岐阜県中津川市南小学校において)

第一日(八月一日)午前九時~午後五時

- 開会の辞・挨拶・物故綴り方教育者への黙祷
講演(午前) 1・作文教育のための農村生活の見かた、考えかた 豊學博士・東大助教授 古島敏雄
2・作文教育のための都市生活の見かた、考えかた 思想の科学研究会 鶴見和子
(午後) 午前の講演をめぐって話し合
司会 国分一太郎
★夜(午後六時~八時)リクレーション ○演「象の死」中津川市教員自立劇団かんじん座出演
会員自由出演
○お国じまん

第二日(八月二日)午前八時半~午後五時

- 作文教育実践報告(午前) : 一人十分:
1・作文指導から体得したものを「教育として成長の自算」 長崎作文の会 草野繁治 愛知 竹内和夫
2・子どもとともに 大阪綴り方の会 清原久元 10・「創作の日」設定の主張
3・裸の生活記録から 茨城 吉原 正 11・クラブ活動による作文指導について
4・一年生の作文指導 高知 広田早紀 12・童詩の学習について 京都 金子欣哉
5・「すずめの子」のこと 紀南作文教育研究会 藤田五子 13・劇と綴り方は手を結べ 新潟 石橋 昭
6・一年生の生活と書くことへの導入 静岡 志大作文同好会 大石みち 14・理科学習と綴り方 福岡 小林 実
7・作文指導と学級経営 北海道作文教育の会 五井治保 15・恵那綴り方の会の歩み 恵那綴り方の会 丸山雅巳
8・校内作文運動(作文大衆化の最も近き方法 兵庫作文の会 八木清規 16・未定 富山 佐野善雄
東京大学教育学部 太田 堯
実践報告をめぐる討論 司会 今井誉次郎 17・未定

★夜(午後六時~八時)座談会

- 作文(綴り方)教師論 綴り方教師の恋愛・思想・経済
司会 辻田清 (岐阜組教文部)

第三日(八月三日)午前九時より

- 主題 作文教育今後の発展のために
議 案 (受付済分) 《議長団 野村芳兵衛 上田庄二郎 鈴木道太 峰地光重
1・国語単元学習における作文の位置づけをどうするか.....千葉県印旛郡国語同好会
2・作文の評価をどうするか.....東京・赤とんぼ会
3・「(日)作文を通して平和のための教育を強力にすすめるべき」と.....長崎作文の会
(日)作文を通して平和のための教育を強力にすすめるべき.....長崎作文の会
4・すべての教師は生活研究者たれ.....茨城県筑波郡北部班文科部
5・子供と親の文集を作ろう.....宮城・教師の会
6・低調な地方における作文大衆化運動をいかにするか.....京都福天作文の会
7・作文教育一般化の諸方策.....兵庫作文の会
8・民族教育確立のため教科研運動に結集しよう.....恵那綴り方の会
岐阜県教育委員会
日本教職員組合
教育科学研究会全国連絡協議会
児童文学者協会
中津川市

★綴り方教育者をしのぶ展

- 主催 日本作文の会 岐阜県教職員組合
後援 教育科学研究会全国連絡協議会
恵那綴り方の会 児童文学者協会
中津川市
《賛助 読売新聞社 平凡社 藝文 教師の友社 国土社 新潮社 実業之日本社 青銅社
泰光堂 中央公論社 鶴書房 東洋書館 標準テスト研究会 牧書店 百合出版社 児童文化
新聞社
運営委員(委員長 今井誉次郎) (順不同)
《日本作文の会 佐藤茂 今井誉次郎 柳内達雄 国分一太郎 吉田瑞穂 来栖良夫 巽聖歌 藤田圭雄
野木地茂夫 滑川道夫 綿田三郎 後藤彦十郎
《岐阜教組 辻田清 和田義人 梅田朝雄
《恵那綴り方の会 石田和男 大島虎雄 近藤武典 中西克己 日比野一郎 吉田和夫 丸山雅 安江武
渡辺春正

